宮尾遺跡発掘調査概報

昭和５９年３月

隠岐島後教育委員会

例　　言

1. 本書は、隠岐島後教育委員会が国庫、県費補助を受けて、昭和58年度に宮尾遺跡において実施した発掘調査の概報である。
2. 調査は近い将来に予想される土地開発にそなえて、遺跡の保護対策を講じるための基礎資料を得る目的で行なわれたものである。
3. 調査組織

調査指導	勝部　昭	島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長
	西尾　克己	島根県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係主事
	若林　久	隠岐島後文化財専門委員
	村尾　秀信	同　上
調査員	門脇　裕	隠岐島後教育委員会社会教育係長
	金崎　慎二	隠岐島後教育委員会社会教育課主任主事
	横田　登	隠岐島後教育委員会社会教育課嘱託
事務局	谷田　義治	隠岐島後教育委員会社会教育課長

4. 調査にあたり、梶谷卒氏、青砥秀行氏、松浦春之亟氏、高梨武彦氏には終始多大な協力をいただいた。又、西郷教育事務所指導主事高橋洋雄氏には、宮尾地区出土の岩石について丁寧なる御教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。
5. 現場における発掘作業、又、遺物整理作業等協力をいただいた下記の諸氏の名を記し、感謝の意を表わす次第である。

（敬称略、順不同）

平山熊雄　平山ヒナコ　高梨五月子　山名ヨシコ　梶谷スズコ　横地キナコ
高梨幸子　芝岡徳長　芝岡政子　中西町子　前田秀子　常角美津子　石倉登
村上久子　佐々木順子　井田喜浩　前田美樹　八幡賢一　吉田均

6. 本書の編集、執筆は、調査指導の諸兄の助言を得ながら門脇裕、金崎慎二、横田登の協議のもとに行なった。
7. 挿図中の矢印は真北を指す。なお西郷における磁気偏角度はＮ7°00 Ｗである。
8. 本書中の高さはすべて海抜高である。
9. 遺構表示は次のとおりである。

ＳＤ　溝跡、溝状遺構

目　　次

Ⅰ　調査にいたる経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2

Ⅲ　調査の概要 …… 6

Ⅳ　遺構と遺物 …… 7

Ⅴ　おわりに …… 14

Ⅰ 調査にいたる経過

宮尾遺跡は、隠岐郡西郷町大字東郷に所在するもので、戦後間もなく、故藤田一枝氏によって発見された遺跡である。採集された多量の石器類は縄文時代のものと推定された。昭和24年、山本清氏（当時島根大学文理学部助教授）が古墳調査のため来島した折、これら多量の採集石器から、かなり大規模な遺跡の存在の可能性を指摘された。その後、土器類も多量に採集されるようになり、型式分類も進み、これらは、縄文前期あるいは早期にまでさかのぼるものではないかとされ、現在までのところ、隠岐島内で判明した遺跡の中では最も古い時代のものである。

昭和29年から32年にかけて、関西大学と島根大学が共同で隠岐島の総合学術調査を実施した。末永雅夫氏を団長とする調査団は、考古学、歴史学、民俗学等あらゆる面から調査研究を実施したが、その時にこの宮尾遺跡の調査も行なわれた。この時には、前述の採集品の実測、写真撮映、現地視察等がなされ、あらためて当遺跡の重要性が確認された。

昭和46年、隠岐島後教育委員会は、故近藤正氏を調査員とし、一ケ月にわたり発掘調査を実施した。調査は遺跡の所在する宮尾半島部分の中間部東側緩斜面を中心に行なわれた。その結果、土器片をはじめ、石皿、黒曜石製石鏃等多量の遺物が出土した。検出された遺構は石器工房跡ではないかともされたが、調査面積も狭く、確認されるまでには至っていない。又、この時に、半島尾根部に数基の古墳の所在も判明した。

以来、宮尾遺跡は古墳の所在も含めて、きわめて重要な遺跡の一つであるとされながらも、その性格、範囲等が正確に把握されないでいる。一方では相次ぐ土地開発により、遺跡の周辺は大幅に変貌し、又、今後も住宅建築、道路新設等の開発工事が充分に予想されるのが現状である。

このような状況の中で、宮尾遺跡の保護対策を立てる上で、当遺跡の時代的位置づけ、性格、範囲等を究明することを目的に、今回の発掘調査を実施した次第である。

参 考 文 献

山本清『隠岐古墳調査報告』　昭和30年

藤田一枝「隠岐島先史時代の遺跡について」　『隠岐郷土研究』第2号所収　昭和32年

山本清「西郷町宮尾遺跡」　関西大学島根大学共同隠岐調査会編『隠岐』所収　昭和43年

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置

隠岐諸島は、島根半島の北方約50～80㎞に位置している。一般に「隠岐の島」あるいは単に「隠岐」と呼ばれているが、隠岐という名称を持つ単一の島は存在せず、大小200近い島々が群島を形成しており、正確には「隠岐諸島」あるいは「隠岐群島」である。

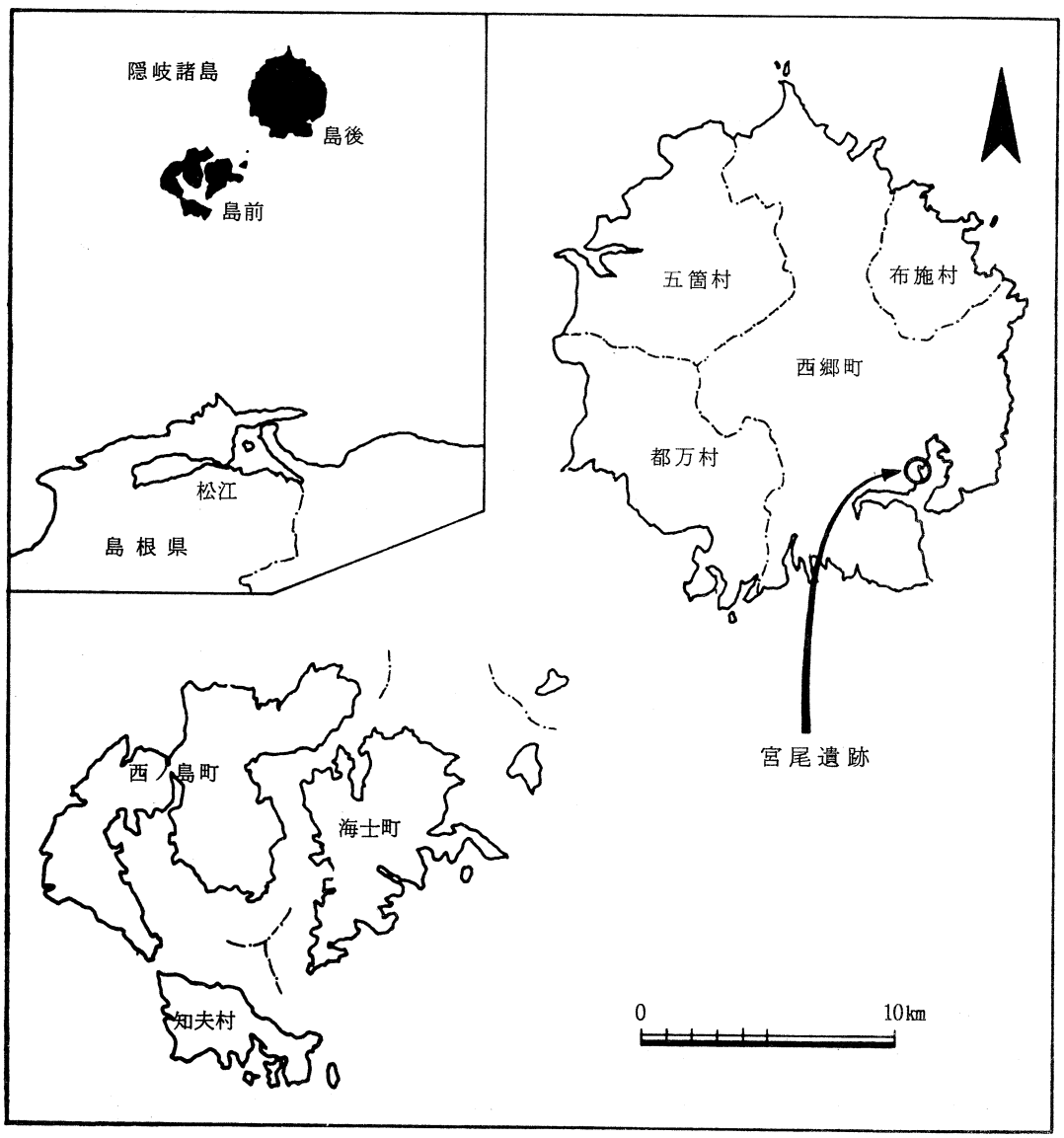


図1　遺跡位置図

200近い島々のうち、住民島は4島で、他は無人島である。4つの住民島のうち南西部に位置する西ノ島、中ノ島、知夫里島の3島、およびその周辺の小島を総称して「島前」と呼び、北東部に位置するほぼ円型の島と、その周辺の小島を総称して「島後」と呼んでいる。

島前は西ノ島町、海士町、知夫村の2町1村、島後は西郷町、布施村、五箇村、都万村の1町3村で構成されている。宮尾遺跡は西郷町の南東部、大字東郷地区に所在する。西郷町は、町の南部に位置する西郷湾岸沿いに発達した市街地（西郷地区）を中心に、古くは隠岐国府の所在地として、近世においては北前船の寄港地ともなり、隠岐島の政治、経済、文化の中心として栄えてきた町である。人口15,000人を数え、面積は島後全体の約半分、123 ㎢である。

隠岐の地形、地質は本土とは若干異なっている。それは、本土の火山帯の多くが第四紀生成を主としているのに対し、隠岐は白頭火山帯に属しており、第三紀時代のアルカリ岩によって構成されている点である。このため島の海岸線は、断崖絶壁が続き、豪壮な景観を見せている。わずかに西郷湾と、北西部の重栖湾が切り込まれ、天然の良港となっている。宮尾遺跡の所在する西郷町の東郷地区は、粗面玄武岩の溶岩台地であり、各所に流紋岩によって形成された円頂丘が点在する。

西郷湾は、東湾、西湾に分かれた溺れ谷で、湾口は250～300 m 位であるが奥は深く入り込んでいる。東の方に入り込んだ東郷湾ともいうべき東湾の、西岸南端に小さな半島が南方へ突出している。これが宮尾半島で、宮尾遺跡の中心的所在地である。半島の基部は西郷地区から東郷地区へ通じる県道が横断している。半島は長さ約200 m 強、最高部で海抜20m内外の高さがある。半島の植生は常緑樹の雑木と竹（先端部に限る）で構成され、特に椎の古木、椿が多い。

湾内は、深く入り込んでいるため波はおだやかであり、海岸へは容易に下りて行くことができる。海岸は礫の多い磯である。特に、半島東側緩斜面は、冬季の北西の季節風を尾根が遮る役目をし、古くから生活に適した場所であったと考えられる。

宮尾遺跡は、このような環境の中に存在する。

参　考　文　献

西郷町『西郷町誌』　昭和50年

田中豊治『隠岐島の歴史地理学的研究』　昭和54年

2．周辺の遺跡

縄文期の遺跡としては、前項で述べたように、この宮尾遺跡が最古の発生であり、前期末葉から後期末葉にかけての下西海岸遺跡、後期を中心とするくだりま遺跡などがある。下西海岸遺跡では、縄文、条痕文、刺突文等を持つ土器が出土しており、石器には、石鏃、石匙、石錘等がある。くだりま遺跡においては、土器の出土は少なく、それらもほとんど無文である。黒曜石製の石鏃、石匙等が多い。年代的には不明であるが、宮尾遺跡対岸の津井海岸遺跡においても、石鏃、凹石等の出土が見られる。

宮尾遺跡の条痕文土器が、山陰本土の「佐太講武式土器」に比定されるように、島後の他地区の縄文土器も、器形、文様等、本土側と非常に酷似した歩みを見せている。この事は黒曜石を媒体とした、何らかの交流を裏付けるものではないかと思われる。すなわち、鏃、ナイフ等の主要原材料である黒曜石は、産出地が少なく、山陰地方においては隠岐島後がその代表的なものである。山陰各地の遺跡で出土した黒曜石は、そのほとんどが島後産のものではないかとされており、今後の科学的究明がまたれるところである。

弥生時代の遺跡は現在までのところ発見例が少なく、周辺においては、八尾平野の東南端八田橋付近で発見された月無遺跡が代表的なものである。この月無遺跡では、土器の外耕作用具も出土している。大城遺跡からは、肩に3個の子壷を持ち、山陰地方では類例の少ないスタンプによる施文の土器が見つかっている。

古墳時代に入ると、この地にもたくさんの古墳が作られるようになる。島後の古墳は、その規模は小さいものの、円墳、方墳、前方後円墳、横穴等と一応の墳形は揃っているが4世紀代の古墳の発見例が今のところ無いという点に、一つの特徴があると言える。

以上、縄文期から古墳期にかけて、極く簡単に概要を述べてきたが、奈良朝以降についても、条里制、国分寺、国分尼寺等確認されており、離島とはいえ、ほぼ中央と併行した文化の歩みを見せている。

参　考　文　献

山本清『隠岐古墳調査報告』　昭和30年

藤田一枝「隠岐島先史時代の遺跡について」　『隠岐郷土研究』第2号所収　昭和32年

隠岐島後教育委員会『隠岐国分尼寺調査報告』　昭和46年

隠岐島後教育委員会『八尾川流域条里制遺跡』　昭和53年

田中豊治『隠岐島の歴史地理学的研究』　昭和54年

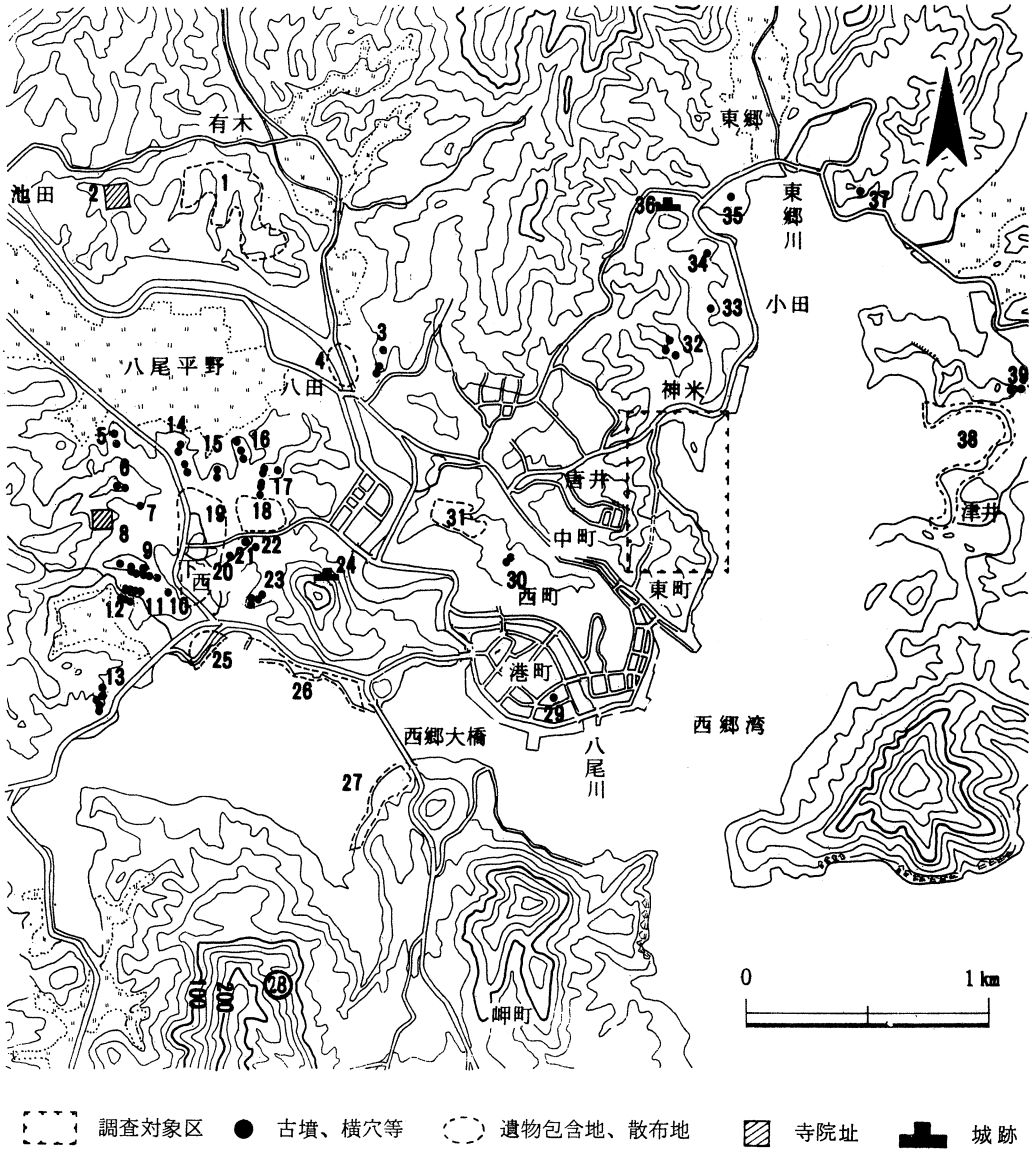


図2　調査地周辺の遺跡分布図

1. 尼寺原遺跡　2. 隠岐国分尼寺跡　3. 名田古墳群　4. 月無遺跡　5. ヒノメサン古墳群
6. 御碕神社古墳群　7. 椿古墳　8. 権得寺跡　9. 玉若酢命神社西方古墳群　10. 億岐家裏山古墳　11. 玉若酢命神社境内古墳群　12. 玉若酢命神社南方古墳群　13. 大座古墳群　14. 小田原宅裏古墳群　15. 斉京谷南古墳群　16. 斉京谷北古墳群　17. 斉京谷古墳群　18. 能木原遺跡
19. 甲ノ原遺跡　20. 二宮神社古墳　21. 国府原二号墳　22. 七人塚古墳　23. 白髪古墳群
24. 国府尾城址　25. 西森宅裏遺跡　26. 下西海岸遺跡　27. くだりま遺跡　28. 飯ノ山横穴群
29. 天神古墳　30. 西郷小学校古墳群　31. 大城遺跡　32. 神米古墳群　33. 小田西光寺古墳
34. 小田高梨宅裏古墳　35. 水産高校西側横穴　36. 宮田城址　37. 飯田小学校裏古墳　38. 津井海岸遺跡　39. 津井古墳群

Ⅲ 調査の概要

調査地の選定については宮尾地区、登具地区、半崎地区の３ケ所を候補してあげた。そのうち、登具地区については、植栽の関係で立ち入ることができず、宮尾地区と半崎地区の２ケ所を発掘調査することにした。

以下、２つの調査区の概要を述べることにする。

１．宮尾地区

昭和46年の調査では、東側緩斜面の一部を調査したわけであるが、今回は半島丘陵尾根部の発掘調査を行なうことにした。まず、地形測量を行なったが、半島西側はかなり急な斜面となっており、下まで降りて行くのが困難なため、最高部（海抜約19ｍ）から、海抜14ｍ付近まで、20㎝間隔の等高線で測量を行なった。それ以下については、西郷町所有の2,500 分の１の地形図を基に作成した。

調査区の設定は、対象区全域に方眼を組むことにした。すなわち、地形測量の結果、円墳と思われるマウンドの頂部に基準杭を設定し、磁北線を基準にとり、それと直交する東西線を座標軸に1×1ｍの方眼を組んだ。磁北線は西から東へ１ｍ進むごとにＥ１、Ｅ２、Ｅ３……とし、同様に東西線は、南から北へＮ１、Ｎ２、Ｎ３……とした。なお、前述の基準杭をＮ100 Ｅ100とした。

表土層は、大体20～30㎝前後で、地山は赤土である。溝状遺構（ＳＤ01 ）が１と石組みが検出された。円墳は確認できなかった。

冬季のため、この尾根部においては、北西の季節風が大変強く、雪よりも、この強風に悩まされた発掘調査であった。

２．半崎地区

宮尾地区と同様に、まず地形測量から行なった。調査区の設定については、地形、畑の使用状況に合わせて４つの小グリッド（総面積108 ㎡）を設定し、発掘調査を実施した。

地山までかなり厚く、深い所では300㎝も有り、平均すると200㎝に近いものとなる。場所的にベルトコンベア等機械の使用ができず、深い所からも人力で排土処理に当ったため、調査はかなり困難であった。

遺構は特に検出されなかった。遺物は、土師器、須恵器から、中世の青磁、白磁等が、混濁した状態で出土した。ただ、いずれも極く小片で、量も少ない。４つのグリッドのうち１つから曲げ物に入れられた状態で渡来銭が出土した。

図3　調　査　区　配　置　図

Ⅳ 遺構と遺物

〔宮尾地区〕

1．遺　構

ＳＤ０１　円墳と思われるマウンドの北側と東北側で検出されたものである。埋土の状態、形状等から同一のものと判断した。底部は緩く弧を描いており、深さは15～20㎝、上場幅１～２ｍである。

未発掘の部分を想定して考えると、マウンドの周囲の尾根を切ったようにも思われるが、伴出遺物も無く、性格は不明である。

石組み　調査区全域ではなく部分的に集中している。特に、基準杭を設定したマウンド付近に集中している。

部分的に見ると、かなり大きい石が規則的に配列されているようにも見えるが、全体的に見ると、かなり不規則な面がある。すなわち、平垣部分、マウンド部分、どちらについても無差別の感が有り、地形との関り合いが見られない。

一応、墳頂部とも思われる部分を、石組みを除去しながら、数回に分けて掘り下げて見たが、同様の石組みが出てくるのみで、主体部の検出はできなかった。

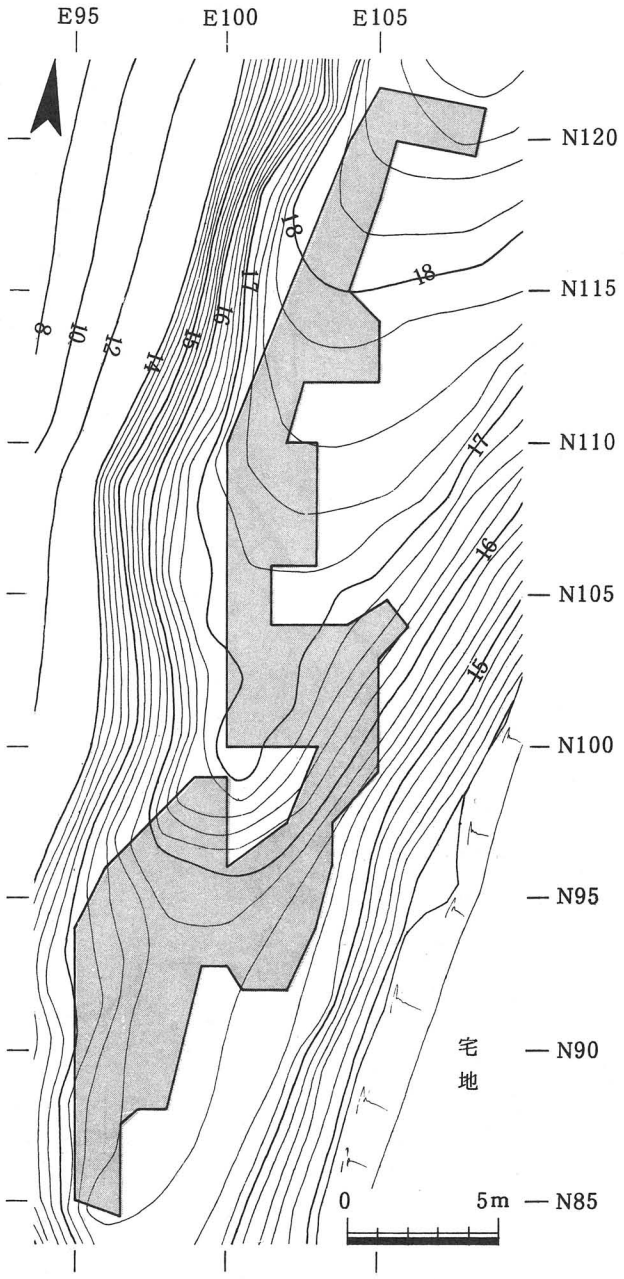


図４　宮尾地区地形測量図（ ▨調査区）

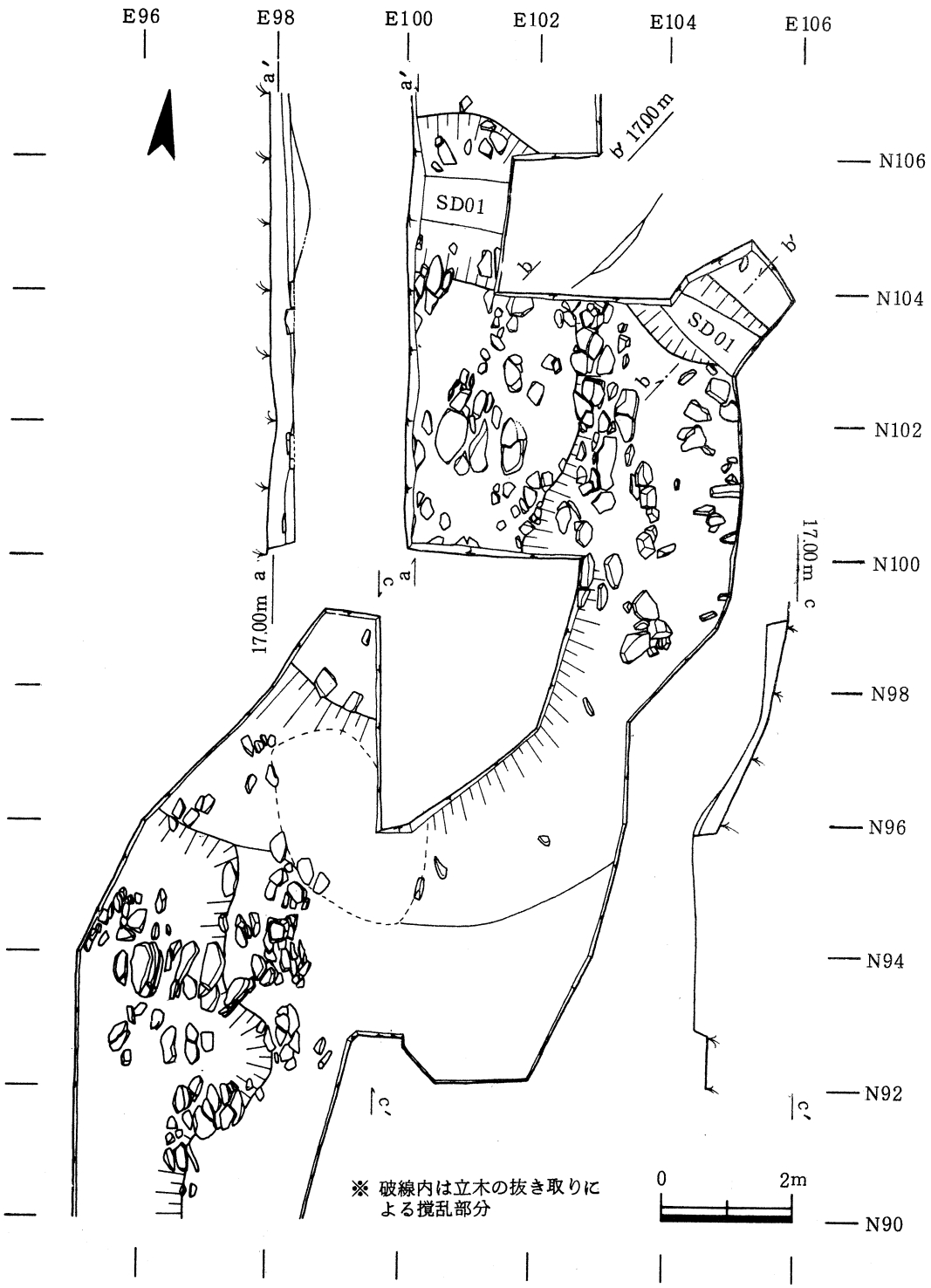

E96
E98
E100
E102
E104
E106
N106
N104
N102
N100
N98
N96
N94
N92
N90
SD01
SD01
17.00m a
17.00m c
17.00m a'
※ 破線内は立木の抜き取りによる撹乱部分
0
2m

図5　宮尾地区実測図

〔半崎地区〕

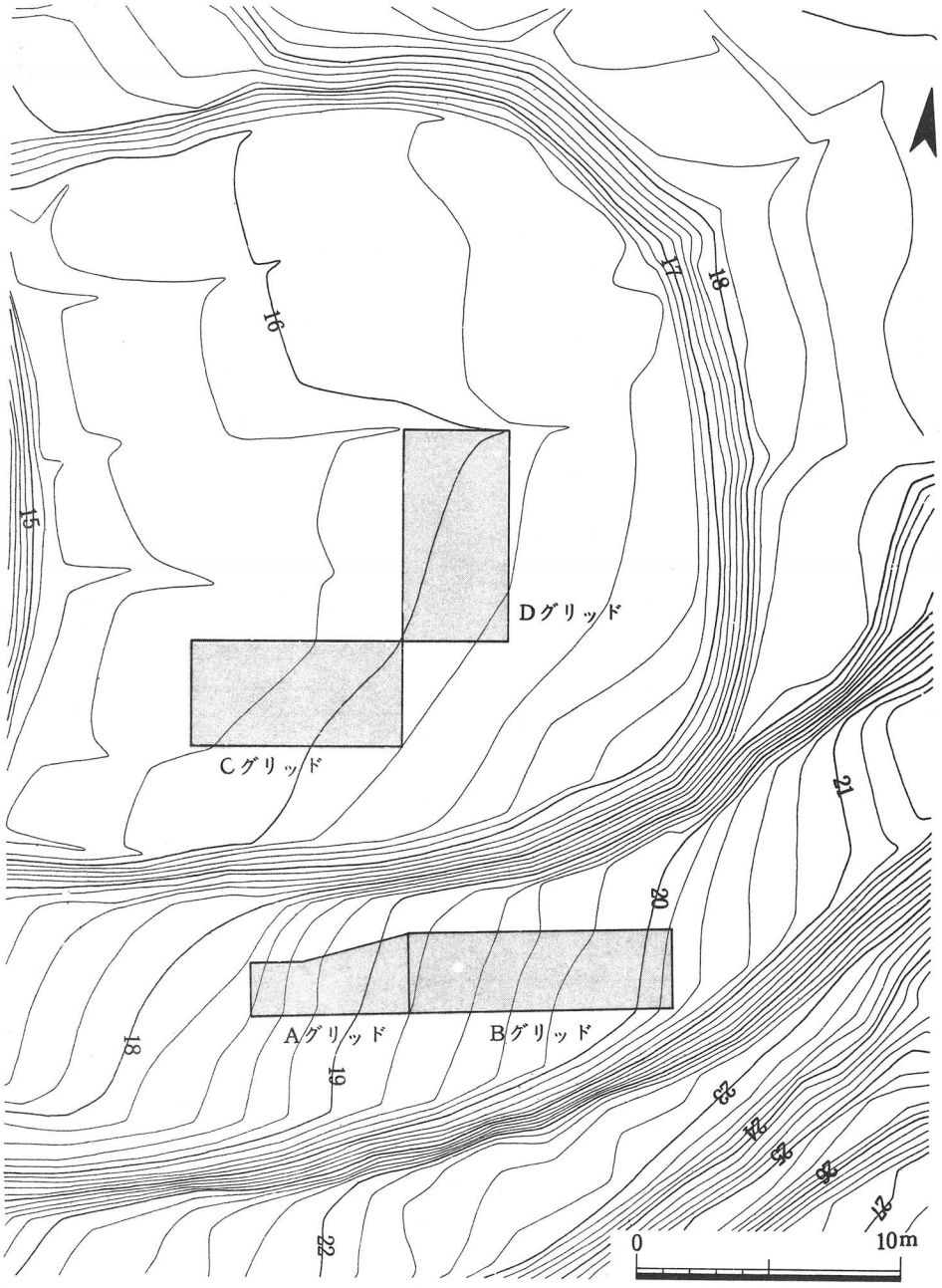


図6　半崎地区地形測量図

1．遺　構

前項で述べたように遺構は検出されなかった。地山は緩かに谷の方に落ちている。

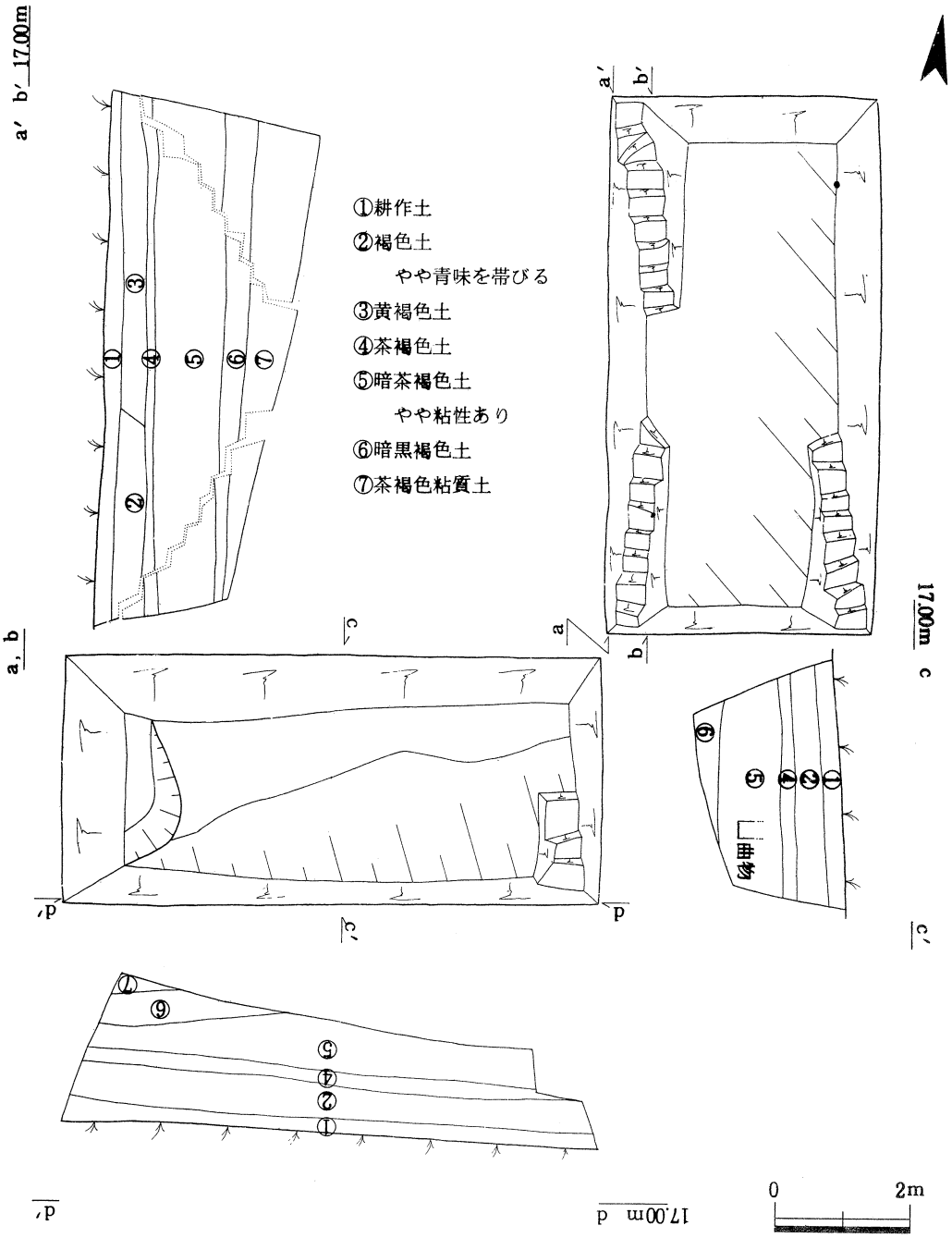


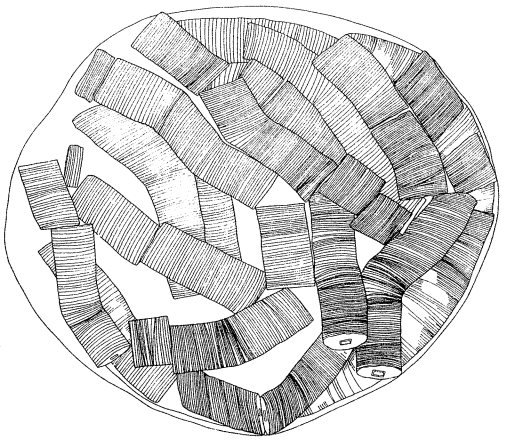
図7　半崎地区　C．Dグリッド実測図

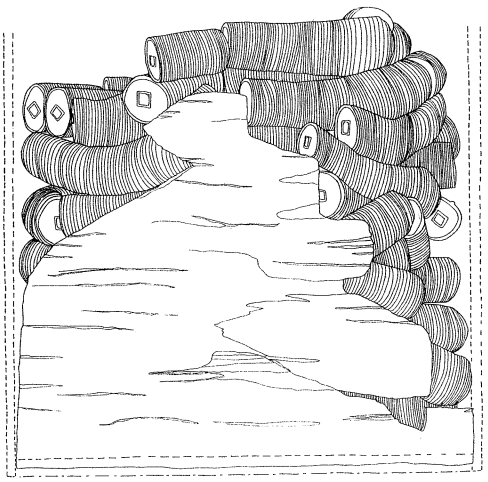
2．遺　物

(1) 渡来銭

Cグリッドから検出されたものである。地表からは、大体120～150㎝の深さになり、層序的には、地表から第4層目、暗茶褐色のやや粘性を帯びた層で、炭化物を多く含んでいる。

渡来銭は、曲げ物の容器に入れられた状態で検出されたが、錆化が著しく、表面は銅製品特有の緑青を帯びており、ほとんどが腐蝕による密着状態で、棒状の小塊として検出された。棒状の小塊となったのは、それらが、植物性（材質は不明であるが、ワラ、又はスゲ属の草木と推定される）の二本縒りの紐を通して、束ねられていたためと思われる。





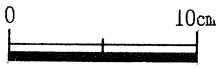


図8　渡来銭出土状況 実測図

1束は、少ないもので95枚（320ｇ）多いもので488枚（1,725ｇ）で、30束に分かれている。大体において100、200、……500枚前後の、百の倍数に近い数で、1束を構成している。それも少い方の数、例えば、9X枚、19X枚、48X枚とかのように、内側の数で束ねられているものが多い。30束のうち、9X枚のも3束、200枚前後のも11束、300枚相当のもの5束、48X枚のもの9束で、400枚に相当するものは無く、4という数字を嫌ったものと思われる。ただ、束ねてあった紐も、相当に傷んでおり、採集時に万全を期したつもりではあるが、どちらの束に属するか不明瞭なものもあり、数枚程度の誤差があるものとも思われる。出土総数は8,716枚で、総重量は30.955㎏である。1枚当たりの平均重量は、約 3.55ｇとなる。

容器である曲げ物の形状は、高さ推定約

２５㎝前後、底板径２５㎝前後で、ふたの部分は腐蝕して完全になくなっている。側面もほとんどが腐蝕して、わずかに全体の５分の１程度しか採集できなかった。残存部分から側板厚は約５㎜と測定できるが、材質は不明である。底板はほぼ完全に残っており、厚さ約１０㎜で、材質は木目（柾目）から、杉材であると思われる。底板には、約２㎜の厚さで籾殻が敷き詰められていたが、これも炭化が著しく、わずかに原形を確認できる程度であった。

渡来銭の銭種については、肉眼で銭銘を判読できるものは6,804枚で、その種類は中国銭５７種類、朝鮮銭１種類（朝鮮通寶）である。国内銭については、判読できるものの中からは確認できなかった。このうち大半のものは宋朝銭で２９種類、4,875枚を数える。鋳造初年次で見てみると、最も古いものは621年の「開元通寶」（唐朝銭）で、最も新しいのは1433年の「宣徳通寶」（明朝銭）である。単独種で最も枚数が多いのは「永楽通寶」（明朝銭）で928枚、「元豊通寶」（宋朝銭）が706枚でこれに次いでいる。１枚しか出土していないのは７種類を数える。

こうした渡来銭は、平安末期から江戸初期にかけて移入されたもので、国内において、「寛永通寶」が鋳造（1636年）されるまで、通貨として盛んに使用された。移入先は中国が多く、朝鮮、安南等からも有り、その種類、数は膨大なものである。銭種別で特に多いのは、唐代の「開元通寶」、宗代の「天聖元寶」「皇宋通寶」「熙寧元寶」「元豊通寶」「元祐通寶」「紹聖元寶」「聖宗元寶」、明代の「洪武通寶」「永楽通寶」などである。今回の出土銭もそれらが多く、又、逆に１枚程度しか確認できなかったものは、全国的にも少ないようである。

以上、肉眼で判読でき得たものについて、全て精銭とした上で論を進めてきたが、今後判読できなかったものも含めて、それらを課題に、さらに整理、検討を加えたい。

(2) その他の出土遺物について

前述の渡来銭が出土したのと同じ層から、鎌倉～室町期にかけての青磁片、白磁片が出土している。又、土師器片、須恵器片も数点出土している。小片のため詳細は不明である。

参 考 文 献

矢島恭介「日本出土銭貨一覧」　日本考古学協会編『日本考古学辞典』所収　昭和47年
日本銀行調査局編『図録日本の貨幣１原始・古代・中世』　東洋経済新報社　昭和47年
坂詰秀一「出土渡来銭の諸問題」　『考古学ジャーナル』187号所収　昭和56年

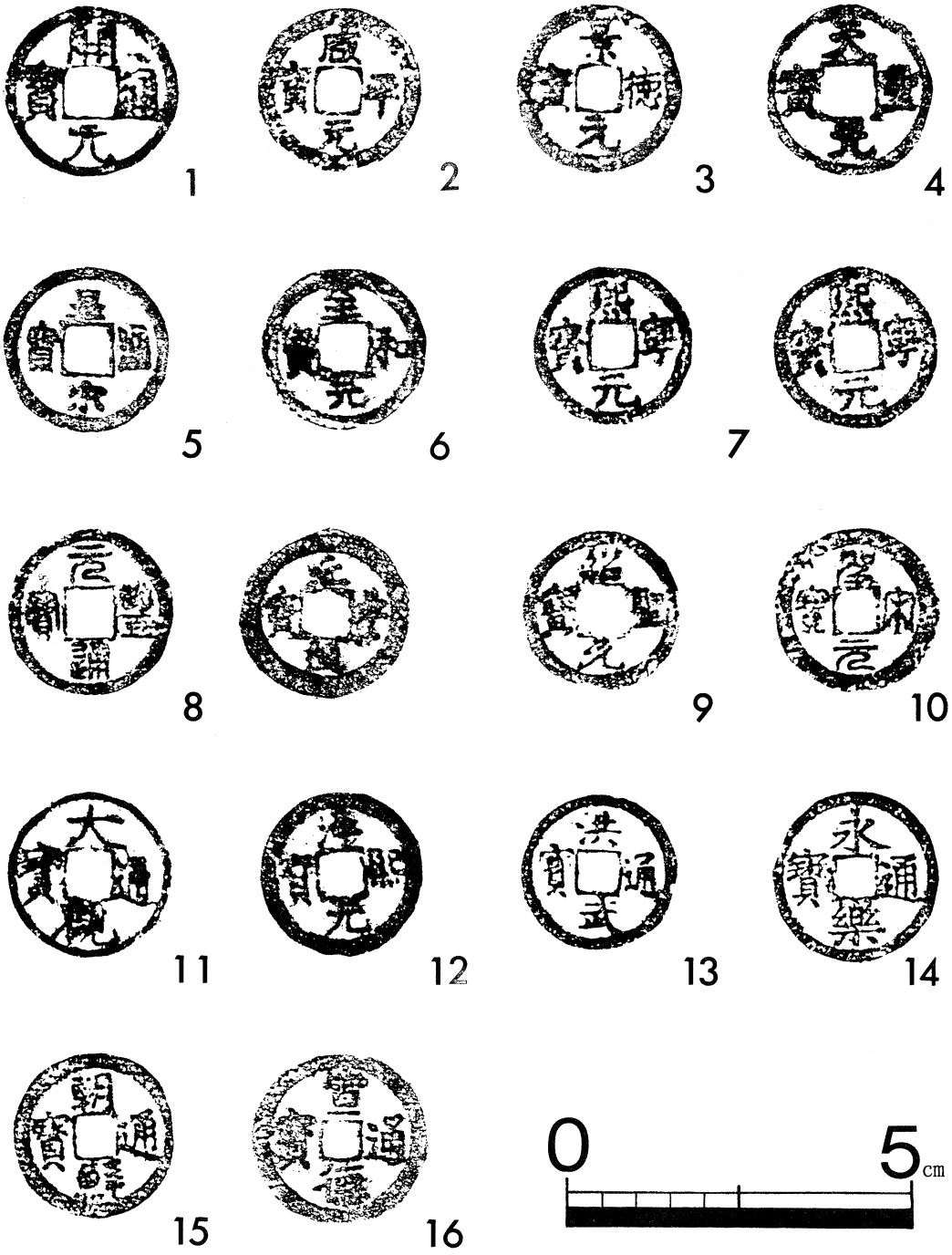


図9　出土古銭拓本

1. 開元通寶　2. 咸平元寶　3. 景徳元寶　4. 天聖元寶　5. 皇宋通寶　6. 至和元寶
7. 熙寧元寶　8. 元豊通寶　9. 紹聖元寶　10. 聖宋元寶　11. 大観通寶　12. 淳熙元寶
13. 洪武通寶　14. 永楽通寶　15. 朝鮮通寶　16. 宣徳通寶

V おわりに

宮尾地区の石組みについては、玄武岩の風化によるものか、人工的なものなのか、人工的なものとすればＳＤ０１を含めたその性格はどうなのか等、不明な点が多いままに調査を終えた。今後、岩石の分析、半島先端部の調査によって、明らかにされるであろう。この項では、半崎地区出土の渡来銭について簡単に考察を加え、又、出土銭貨の一覧表を掲載することで結びにかえたい。

渡来銭について

日宋・日明貿易によって移入され、国内に大量に流通した渡来銭は、日本各地に出土例が見られる。それらは大別すると３つの型に分類できる。すなわち、

①災害等により自然に埋ったもの
②墳墓等に奉賽的に埋納されたもの　｝となる
③備畜のためのもの

今回の場合、調査面積が狭く、他の遺構との関連が把めないが、出土状況・数量等から見て、③備畜のためのもの、すなわち備畜銭と考えて良いであろう。全国的に備畜銭は、城跡、館跡、神社仏閣の境内地など支配階級や、富裕な階層に関連する遺跡での出土例が多い。

次にこの渡来銭の埋蔵時期についてであるが、前項で述べたように一番新しいのが、１４３３年の「宣徳通寶」で、その後の銭種については確認されていない。簡単に言えばそれ以降ということになる。下限については、強力な論拠とは言えないが、江戸時代に入り盛んに流通した国産の「寛永通寶」が入ってないことから、それ以前としたい。すなわち、埋蔵時期については、幅をとって１５世紀中頃から、１７世紀中頃までとしておきたい。

今後、近接の遺跡や、他地区の状況、又、容器の曲げ物の製作工法の時代的位置づけ等によって、より正確な時期の比定ができるものと思う。

表１　出土渡来銭の束別数量

束No.	数量 枚	重量 g	１枚当たりの平均重量 g
1	289	1,010	3.49
2	227	790	3.48
3	200	715	3.58
4	245	860	3.51
5	157	530	3.38
6	194	695	3.58
7	194	695	3.58
8	95	320	3.37
9	98	340	3.47
10	193	685	3.55
11	196	690	3.52
12	292	1,040	3.56
13	212	750	3.54
14	97	350	3.61
15	178	645	3.62
16	195	695	3.56
17	195	685	3.51
18	290	1,040	3.59
19	289	1,040	3.60
20	483	1,755	3.63
21	481	1,735	3.61
22	484	1,580	3.26
23	291	1,105	3.80
24	194	695	3.58
25	484	1,740	3.60
26	485	1,740	3.60
27	485	1,730	3.57
28	481	1,725	3.59
29	488	1,725	3.53
30	485	1,725	3.56
※	39	125	3.21
計	8,716	30,955	3.55

No.…ふたに近い方から順に付したもの
※…所属束不明

表2　出土渡来銭の種別数量

種別	初発行年	枚数	率(%)
中国唐朝銭		521	7.66
開元通寶	621	498	7.33
乾元重寶	760	22※	0.32
開元通寶	845	1	0.01
中国五代十国銭		4	0.06
光天元寶	918	1	0.01
乾徳元寶	919	3	0.05
中国宋朝銭		4,875	71.65
宋通元寶	960	17	0.25
太平通寶	976	51	0.75
淳化元寶	990	63※	0.93
至道元寶	995	80※	1.18
咸平元寶	998	138	2.03
景徳元寶	1004	132	1.94
祥符元寶	1008	161	2.37
祥符通寶	1008	89	1.31
天禧通寶	1017	138	2.03
天聖元寶	1023	297※	4.37
明道元寶	1032	32※	0.47
景祐元寶	1034	88※	1.29
皇宋通寶	1037	612※	8.99
至和元寶	1054	53※	0.78
至和通寶	1054	16※	0.24
嘉祐元寶	1056	46	0.68
嘉祐通寶	1056	96※	1.41
治平元寶	1064	135※	1.98
治平通寶	1064	20※	0.29
熙寧元寶	1068	492※	7.23
元豊通寶	1078	706※	10.38
元祐通寶	1086	488※	7.17
紹聖元寶	1094	237※	3.48
元符通寶	1098	105※	1.54
聖宋元寶	1101	251※	3.69
崇寧通寶	1102	1	0.01
大観通寶	1107	64	0.94
政和通寶	1111	254※	3.73
宣和通寶	1119	13※	0.19
中国南宋銭		115	1.69
紹興元寶	1131	1	0.01
淳熙元寶	1174	39※	0.58
紹熙元寶	1190	9	0.13
慶元通寶	1195	9	0.13
嘉泰通寶	1201	6	0.09
開禧通寶	1205	2	0.03
嘉定通寶	1205	20	0.30
大宋元寶	1225	1	0.01
紹定通寶	1228	6	0.09
嘉熙通寶	1237	1	0.01
淳祐元寶	1241	8	0.12
皇宋元寶	1253	3	0.05
開慶通寶	1259	1	0.01
景定元寶	1260	5	0.07
咸淳元寶	1265	4	0.06
中国金朝銭		17	0.25
正隆元寶	1158	8	0.12
大定通寶	1178	9	0.13
中国元朝銭		8	0.12
至大通寶	1310	2	0.03
至政通寶	1351	6	0.09
中国明朝銭		1,245	18.30
大中通寶	1361	2	0.03
洪武通寶	1368	273	4.01
永楽通寶	1408	928	13.64
宣徳通寶	1433	42	0.62
朝鮮銭		19	0.28
朝鮮通寶	1423	19	0.28
肉眼で判読が困難なもの		1,912	

※ 字体、背面文字の異なるものが、2～3種類含まれているもの。

率(%)は判読できたものの総数 6,804 枚に対する比率（端数処理の関係で合計は100.01%になっている。）

参考文献

矢島恭介「日本出土銭貨一覧」　日本考古学協会編『日本考古学辞典』所収　昭和47年

日本銀行調査局編『図録日本の貨幣1原始・古代・中世』　東洋経済新報社　昭和47年

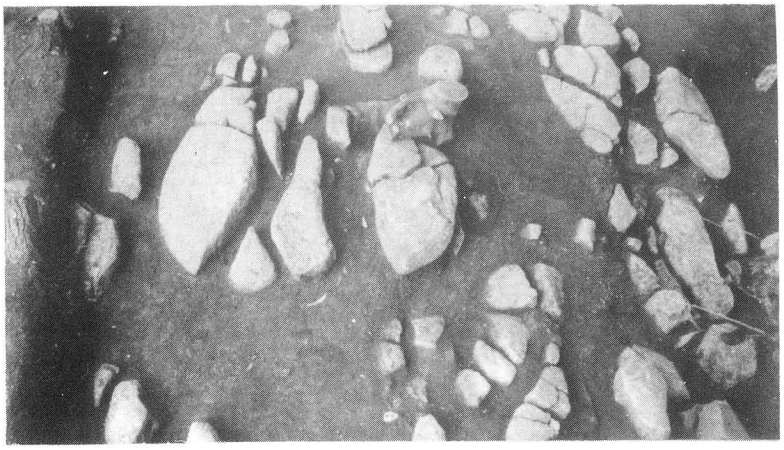
坂詰秀一「出土渡来銭の諸問題」　『考古学ジャーナル』187号所収　昭和56年

是光吉基「各地域出土の渡来銭　九州・中国・近畿地方」　同上

宮尾遺跡周辺の航空写真（昭和30年代）

宮尾地区　調査風景

南から



西から

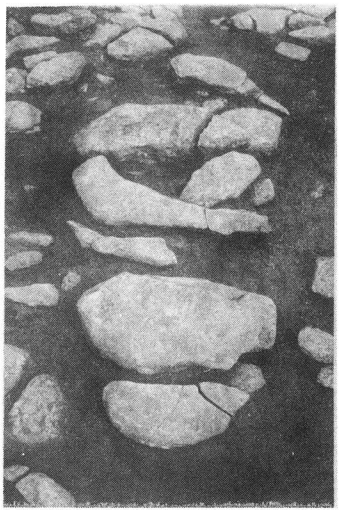
北から

宮尾地区　マウンド頂部の石組みの状況

南から

北から

西から



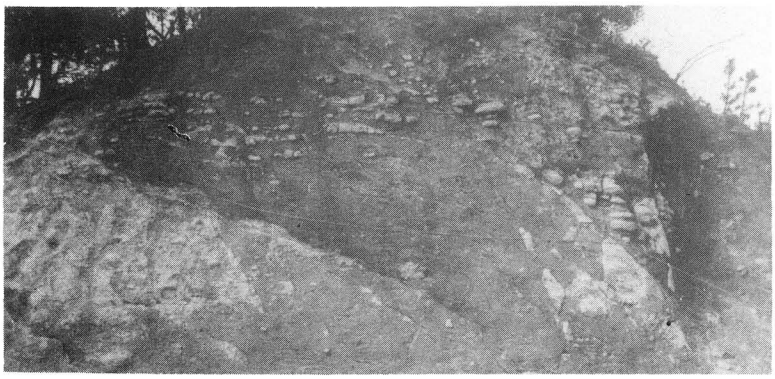
宮尾地区　マウンド南側の石組みの状況

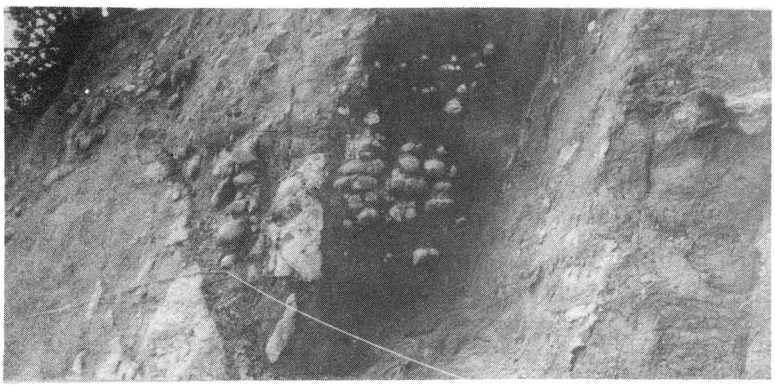
東から

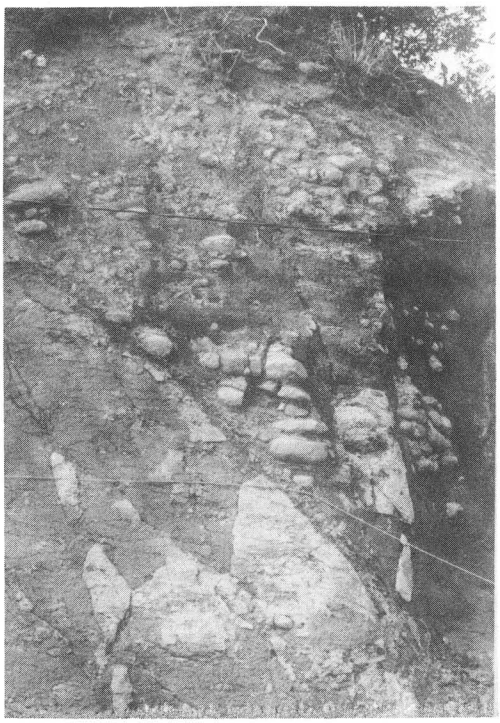
南から

西南から

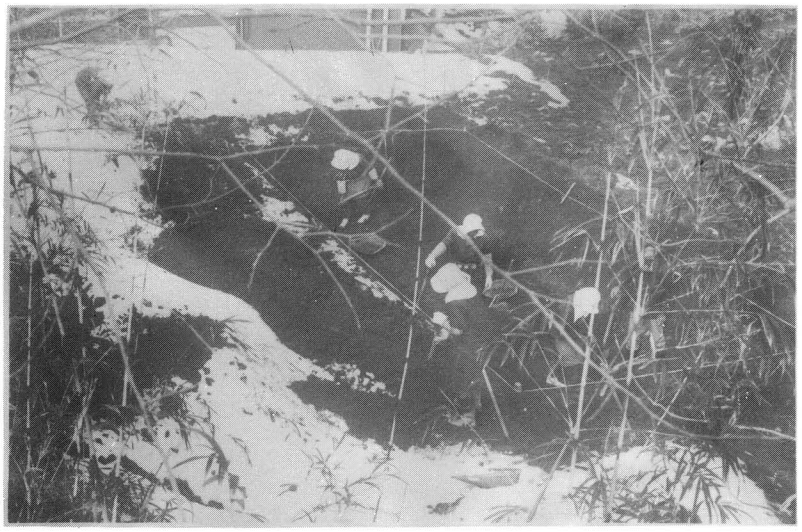
宮尾地区　SD01





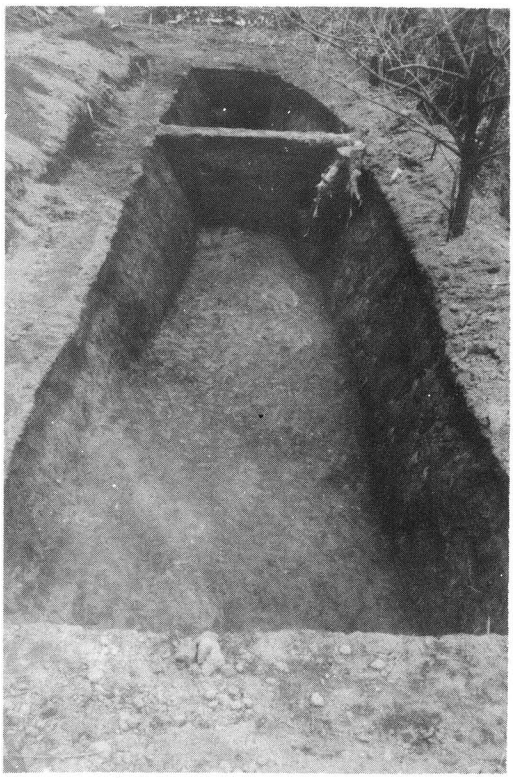


宮尾地区　半島基部の地山内の玄武岩



半崎地区　調査風景

Aグリッド　西から



Bグリッド　東から

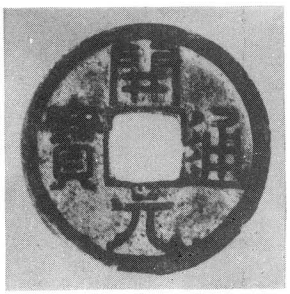
Dグリッド　南から

半崎地区

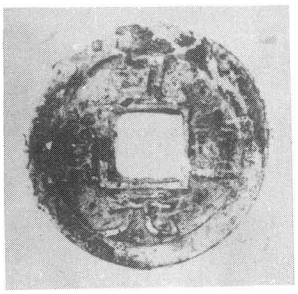
半崎地区　Cグリッド渡来銭出土状況

出土渡来銭（倍率不詳）

中国唐朝銭

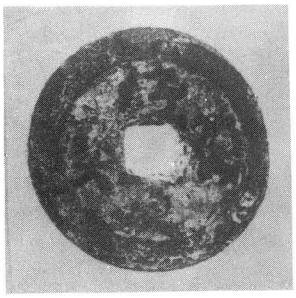


開元通寶

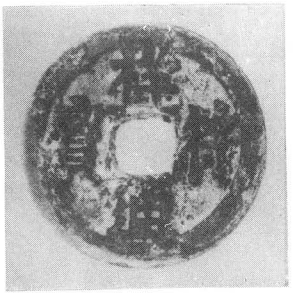


乾元重寶

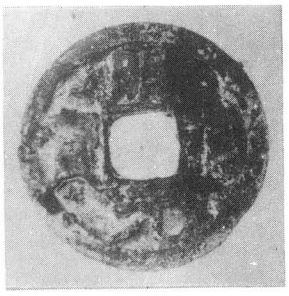
中国宗朝銭



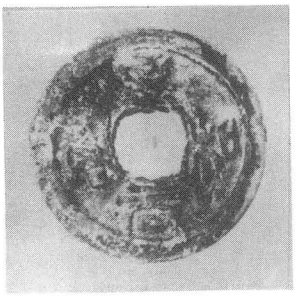
淳化元寶



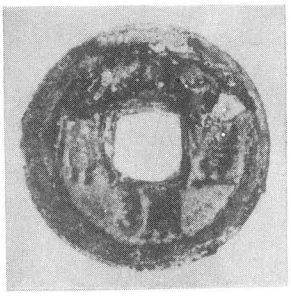
祥符通寶



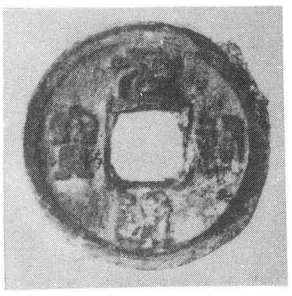
明道元寶



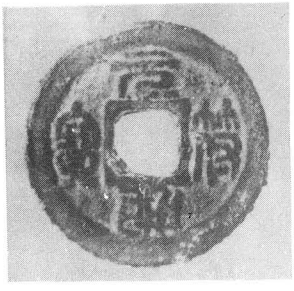
至和元寶



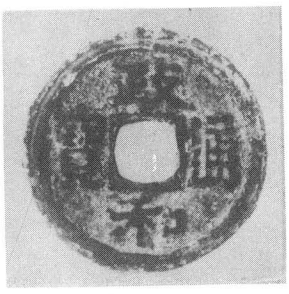
元豊通寶



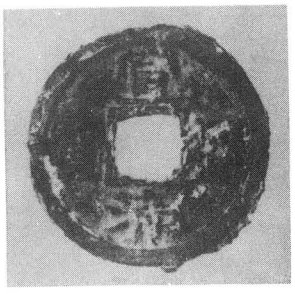
元祐通寶



元符通寶



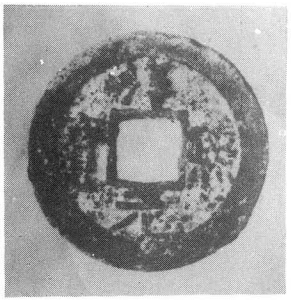
政和通寶



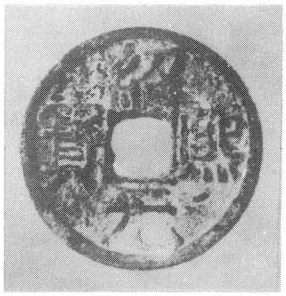
宣和通寶

出土渡来銭（倍率不詳）

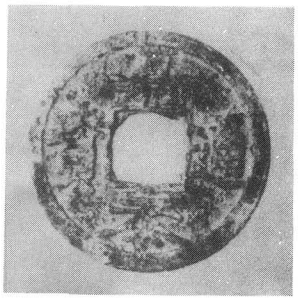
中国南宗銭



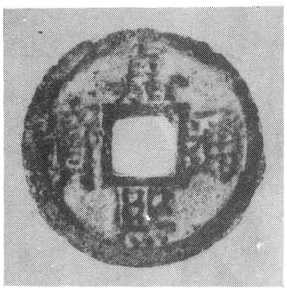
淳熙元寶



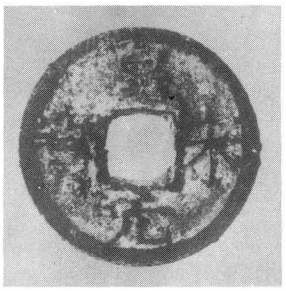
紹熙元寶



嘉泰通寶

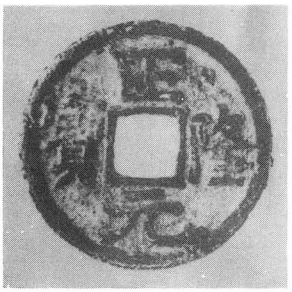


嘉熙通寶



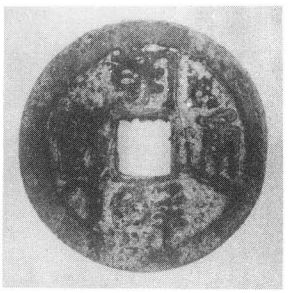
皇宗元寶

中国金朝銭



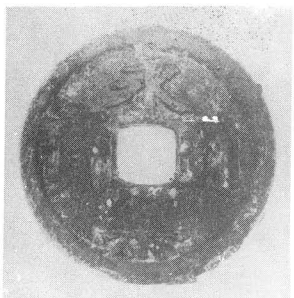
正隆元寶

朝鮮銭

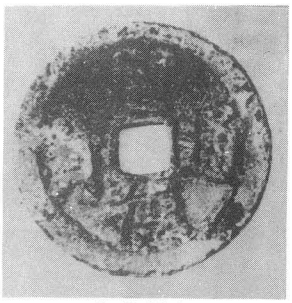


朝鮮通寶

中国明朝銭



永楽通寶



宣徳通寶

宮尾遺跡発掘調査概報

編　集　隠岐島後教育委員会
〒685 隠岐郡西郷町西町八尾の一, 58
発　行　昭和59年3月31日